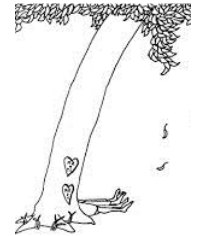




Heart to Heart



あい学習と道德教育

～「あい学習」を通して、考え、語り合う道德教育をめざして～

北城陽中学校の教育は、生徒一人一人が「自立・自律」することを目指しています。「自立・自律」とは、優れた「人格」の土台の上に、未来を切り開く「能力」を発揮することです。この「人格」を高める取組として、本校では、平成14年度から学校改革の方策として「道德教育」を核とした教育を行ってきました。そして、今日まで研修、研究を重ね、より良い道德教育を目指して日々、努力を重ねています。

昨年度より本格実施し、学習成果が見られた「あい学習」、「あい学習」は二人組で意見交換をしたり、四人組で話し合ったり、活発に意見交流をしながら、学びを深める学習スタイルです。本年度より、この「あい学習」を道德教育にも取り入れて、一人一人が「考える」ための授業を行っています。

それでは、道德で「考える」ということはどういうことでしょうか。道德的な諸問題について、考え、語り合うということはもちろんですが、「考える」ためにはそれだけでは足りません。例えば、「ルールを守らなかつたら厳罰にすることについてどう思うかを考え、それぞれの立場で話し合いなさい」というテーマが掲げられたとします。授業ではまず、このテーマについて、「賛成か反対か」という立場を明らかにするために考えなければなりません。その「考える」は、道德教育で言う「考える」とは少し違います。道德教育で言う「考える」は、「ルールはなぜあるのか」「ルールでなければ守らなくてもよいのか」「守るべきものは何なのか」ということについて考えることです。「ルールは守らなければならないから守る」というのは、「考える」というより条件反射です。同じ理由で、「語り合う」ことも、ただ「白黒つけるため」とか「どちらがよいかを定めるため」というのでは、口が立つだけの人を育てることになってしまいます。

道德の時間にすべきことは、このテーマをきっかけにして、「ルールを守る主体者である、私たちがどのようなことを大切にすればよいのか、そうすることによってどのような恩恵がもたらされているのか」という、本質的な部分を子どもたちに考えさせることです。だから、考えれば考えるほど「そういうことか、それは素敵だなあ」と心が動いたり、「よし、もう一度ルールを見直してみよう」とやる気がわいてきたりすることが大切です。「分かった!」と「いいなあ!」と「よし、やるぞ!」は連動しているのです。本校では、道德の授業でしかできない本質的な学びを促し、子どもたちを「考える主体」にすることが目標です。話し合いたい、実践したいと思わせるような道德の時間となるよう教職員が一丸となって研究をすすめていきます。



北城陽中学校道德教育重点項目

- ①自分で考え誠実に実行し、結果に責任をもつ【自主、自律】
- ②思いやりと感謝の心で人間愛の精神を深める【思いやり、感謝】
- ③法やきまりを守り、規律ある社会をつくる【遵法精神、公德心】



「特別の教科道徳」

平成31年4月より、「特別の教科道徳」が始まりました。道徳科が、「特別」である理由は、「教科」とは異なるところがあるからです。「教科」を担当する教員は、専門免許（中学・高校）が必要ですが、「特別の教科道徳」では、専門免許は設けず、原則として学級担任が指導します。また、数値等での評価を行わず、文章での評価となります。しかし、検定教科書を使うことに関しては、他の教科と同様となります。

道徳の「教科化」の理由として、現行の道徳教育における指導法・内容のばらつき等の改善が必要であることを挙げた上で、「いじめ防止に大きな効果が期待できる」こと、「学校教育の真の中核としての役割を果たせるようにすべき」などといったことが挙げられています。また、教科化に伴って、以下のように目標も明確で理解しやすいものに改善されています。

道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、自己の人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

つまり、道徳科でも、他の教科と同様に「主体的・対話的で深い学び」が求められており、本校で実施している「あい学習」による、考え、語り合う手法が大きな効果をもたらすと期待しています。

北城陽中学校の道徳の時間

1年生「ある日のバッテリーボックス」

ある小学校で体の不自由な児童○君がいるクラスを担当した先生が、その子のために様々な配慮をします。しかしその子の表情はさえません。ある日、通りがかった空き地で他の児童と一緒にソフトボールをして遊んでいる○君の姿を見かけます。子ども達は○君ができるルールを考え、○君は、生き生きと仲間と共にソフトボールを楽しんでいました。友達のハンデをごく自然に受け止め、その中で同化しようとするさりげない発想、そのなかに真のノーマライゼーションの姿を学びます。

障がいがある○君の友達は、○君の気持ちを理解した上で、○君の体の状態を考えて、○君も一緒に楽しめる遊びを真剣に考えることができ、人を思いやることのできる子ども達でした。今日の道徳では相手を思いやり、相手の目線から考えることができないと、本当の思いやりではないと気づきました。障がいがあっても、なくても私たちは同じ人間で、不公平に接する理由はありません。偏見をなくし、誰もが公平に扱われる世の中を作っていくことがこれからの私たちの役目です。（1年生）

2年生「樹齢七千年の杉」

椋鳩十さんの紀行文。屋久島にある樹齢七千年の杉「縄文杉」に会いに行った筆者は、その年輪の重さに深い感銘を受けます。七千年といたらどんな歳月なのでしょう。日本の歴史の始まるずっと前、まさに縄文の時代。「なんとまあすごい命だ。七千年の命が私の目の前にどしんと立っているのだ」と椋鳩十さんは感動します。杉という木は千年でも二千年でも命の終わる瞬間まで杉の実をつける。命の火を燃やし続ける。筆者はそんな杉の姿に、人間の生き方を重ね合わせます。

七千年という長い、長い間、自分の力で生きてきたことに感動しました。晴れている日にきれいな夕日を見ながら帰ると、落ち込んでいるときでも前向きになれたり、明日はきっと大丈夫だと思ったり・・・。
自然はほんとうにすごいです。
(2年生)



3年生「山寺のびわの実」

村の誰からも好かれる山寺の和尚でしたが、甚太は、「性にあわねえ」と一方的に嫌っていました。甚太は三年前、一人娘のつめを荷馬車からの転落事故で亡くしてからというもの気性を荒げて乱暴になりました。ある日、甚太はとめに供えてやろうと好物だったびわを取りに行きます。托鉢中の和尚が邪魔で取ることができず、それに気付いた和尚は甚太に謝りますが、甚太は通り過ぎながら和尚を突き飛ばしていきました。その夜、和尚がとめのためにびわを供えようとしていたことを知ります。

私は甚太の行動を変えたのは、おっさんへの感謝や申し訳ない気持ち、そして憧れだと思う。誰でも嫌いな人はいるし、人の好き嫌いがあるのは、しょうがないことだけど、それを態度に出したり、相手の非ばかりを見るのではなく、自分にも悪いところはあるのではないかと考えられるおっさんのような人は強い心の持ち主だと思う。（3年生）